

## 詩的衝動力としての「エロス」の問題（3）

—W. Whitman と R. M. Rilke の場合

新 井 章 慶

### On Eros as a Poetic Impulse (3)

— The Case of W. Whitman and R. M. Rilke

AKIYOSHI ARAI

1914年、Rilke はウィーンの若い女流ピアニスト Magda von Hattingberg と知り合うようになる。Magda は R. のある作品の熱烈な讃美者であった。R. はパリーから Magda に当てて10数通の手紙を書いているが、それらは、R. 自身も言っているように、彼の内面生活の親密な告白とも言うべきもので、我々にとって大へん貴重なものである。当時厳しい孤独と不安に悩んでいた R. の心は、この一女性からの手紙がきっかけとなり、堰を切ったように溢れ出る。彼はまだ見たこともない Magda のからだを部屋のなかに感じては、話しかけたりする。そんな状態で、彼は、毎日せせと彼女に当てて長い手紙を、ときには1日に何通も書くのである。その中で R. はこんなことを言っている、「もし私があなたにお会いしたならば、私は何よりもまず、あなたの手を私の両手のなかに取って、好きなだけ長く、あなたの手をその儘にしておくでしよう。そして、それから私は再びいつもの私の孤高のなかに戻ってゆくでしよう、敢えてそのほかの事は何んにもしないで。しかし、いく<sup>ひ</sup>日かの午後、<sup>ひとひ</sup>一日の夕べ、そして散歩を一諸にいたしましょう....」これは、単なる R. のポーズではなかったであろう。むしろ、本来彼の内部にあった官能欲への肯定と、一見それと矛盾して共存するもう一つの姿勢、すなわち彼の禁欲的傾向をこれはよく表わして興味深い。後年、彼は夏の湧き水についてこう歌っている、“手首をつけて、その晴朗な冷たさを全身にしみ通らせる。それだけで私はわが渇きをいやす。飲むことは過剰、あまりにあからさま...”(一部要約) これは、ある別の女性との交渉を比喻したものであるが、やはり一貫した R. の傾向がここにも窺われる。

さて、Magda への愛情がつのってゆくのを R. は感じつつ、彼は自分の心が二つに分裂するのを意識する。彼は人間に甘えるには余りにもペシスティックである。また現実の女性をも十分に経験していた。彼は Magda に書く、「私は“神にあなたを愛<sup>あ</sup>い<sup>い</sup>ま<sup>ま</sup>してください”と懇願するかと思うと、すぐその同じ息で、神に“孤独を守る戦闘的な意志力を私に与えたま

え”と懇願するのです。そうであるのが私の全使命なのですから、お分りでしょうか。私は、このまま、わが穢れなき心臓に恍惚のたいまつを点火して、我れとわが身を燃やして、只ひとすじの炎となって神にまで昇ってゆくかもしれません。」R. はまた Magda への別の手紙で書いている、「私がプラトンの Symposium の中で、“Eros(愛の半神半人)は美しいはずがない”というソクラテスの言葉を読んだとき、私の魂の深奥部が火を噴きました。」この世のものと、かなたなるものと、この二つの間を、絶えず両方の声に呼びかけられながら、夜も昼も眠れず、やせ衰えた Eros の姿が P. には見えるようであった。自分を深く敬慕する Magda との文通のあいだに、彼は、孤独を守ろうとする自分の心が女性の愛の魅力に深くひき寄せられてゆくを感じた。仮そめのものか、永遠なるものか、のディレンマに悩む R. には、この Eros の物語はひとごとではなかったのである。(因に R. には、すでにクララという妻が居た。共に芸術家であった二人は、創作上、経済上の理由から、その時までにかれこれ10年以上別居生活がつづいていた。)

女性は、R. にとって少年のころから不思議な魅力であったと、彼は Magda にも告白している。しかし以下は、彼女を知る一年前のことである。R. はある静かなルーアンの街でとおろすがりに一人の女性を見て、ひどく心を動かされた。そのために彼はしばらく何を見ても上の空で、心が落ち着かなかった。彼を襲う“Sehnsucht”(憧れごち), それは詩人のかなしみの源であり、同時に、歓びと創造への火の力でもある。しかし、R. は、こう反省するのである、「まるで私はいつも望遠鏡のそばに立っているみたいに、近づいてくる女性を見ては、たちまち、その女に至上の幸福 (Seligkeit) を期待するのです。しかし、その様なものは誰にもあるはずがないのです——かつて私が私の最も孤独な時間に見出したことのある、あの至上の幸福、わたしの至福は……」(Lou Andreas-Salomé への手紙) こういうふうに R. は自分のしよのない憧れごちを叱責するのである。彼は、この事より前すでに第二悲歌 (1912) で、歌っている。

恋しあう者らよ、君らが互いにせりあがって口と口を重ねあわせ  
——飲み、また飲むとき、  
おお、なんと奇妙にも飲むものは、  
はやその振舞から逃げていることか。

地上の「愛」が内に暗く蔵している背離性に、R. は目をつぶるわけにゆかなかった。いつかは露れる。我々は自己の運命に気づかぬ振りをしているだけである。しかしながら、それは恋人たちのことに限らない。人間のことは凡てそうである。だから、Schicksal(運命)という言葉が、どんなに R. の作品のあちこちから聞えてくることだろう。我々の「生」の胎内深くうみつけられた、何ものによっても癒されることのない恐るべき不治の病。それは今の言葉でいえば、“実存の孤独”、“生の不条理”であろう。それは、人間の憧れが高ければ高いほど、強く意識されるのである。

上述のルーアンの出来事と関係があるかも知れない、その頃、R. はこんな詩を書いている。その一部を引用すると、

なぜお前は、見も知らぬ恋びとの伏せた顔を憧れるのか。  
 もしお前の憧れが、世の終りを告げる天使のラッパから、  
 嵐とすさぶ嘯唳の響きをもぎとるほどの  
 呼吸<sup>いき</sup>を持たなければ、  
 おお、それなら、その女もまた存在しないのだ、何処<sup>いづこ</sup>にも。  
 また決して生れてもこないだろう、  
 お前がなえるほどに恋いもとめるその女は。 —1913

この詩からも分るように、R. は女性への憧れを心の迷いとして断念すべきだ、とは決して考えない。人間を威嚇する運命のかなたに、それを成就させる道がある。その道による以外は、一切は——彼女も、そして何もかもが虚無にすぎない。憧れは、断念されるべきどころか、もっともっと高められねばならない——果しなく（“終末を告げる天使のラッパの音をもぎとるほどに”）。R. がみずからに否定するのは、憧れを近くに成就させて満足する、人間の甘さ、自己欺瞞なのである。

ここで、R. が女性に対して抱いていた憧れとは、どんなものであったか、一言触れてみたい。彼の「憧れ」は、肉体的な渇きだけに由来するものではなかったことは明かである。それは、絶えず彼にまつわりついて離れない、“人間の運命”という暗い固執観念と、やはり、無関係ではありえなかった。「女性」は、彼の暗い *Schicksal* の観念の向うがわに對置された優しい救いのイメージであった——ちょうど彼が薔薇の花や子供や、ときに動物の目に、それを感じたように。R. は、＜女性なるもの＞に、時間を超えた存在を感じる。彼は彼女らを、“みずからは、か弱くして、しかも我らを祝福しうる者たち”と呼ぶ。彼女らは、つねに憎しみによって傷つけ、傷つけられる我々にとって、安らぎであり、癒しの樹蔭である。“いきり立つ男のうしろにあって聖なる回帰にみちたオイリュディケの妹たち”と R. は歌うのである (*Gegen-Strophen*, 1922)。R.にとって、禁断の木の実をさきにとって食べたのはアダムであり、イブではない、そうであるかの様に R. は *Neue Gedichte* (新詩集, 1908) のなかで描く。女性の神聖視である。(しかし、それだからと言って、R. は女性との肉体的交渉を決して否定していない。むしろ、彼は、それが正しくなされるときの意味の重要性を強調さえしているのである。「肉体的な快楽は…我々に与えられている一つの大きな限りもない体験なのです。それは、世界の智慧であり、あらゆる知識の充溢であり、輝きでもあります。」—F. Xaver Kappus への手紙, 1903)

さて、「人間の目は外にひとかけらの円弧を見れば、内なる心にひとつの完全な円環を描く」とエマソンは何処かで言っているが、古代の詩人は、その様に、夜空に輝く星屑のかたまりに意味ある形象（星座）を描き、それに美しい名称を与えた。そのごとく R. は、女性のうちに

聖なるオイリュディケを見るのである。この様にして、R. の女性への限りない憧憬は、彼にとって女性を抗しがたいほどまでの魅力ある対象にってしまう。

お前は、すべての物がまるで恋人の接近を告げているかのように、  
たえず期待に心をかき乱されてきたではないか。

ドゥイノ第一悲歌(1912)にうたわれたこの詩句は、自分自身に向けられた痛切な、彼の告白であり、かつ自己への戒めのことばでもあった。此処にあると見え、肉の器<sup>うつわ</sup>に美しく咲くと見える浄福 (Seligkeit) の花は、此処には無い。そうとは知りつつも、やはり R. はできなかった。女流ピアニスト Magda の手を軽く、自らの両手に受けとめて、そこに「浄福の女性なるもの」のすべてを感じとることが、R. にはできなかった——あのきらめく夏の水の冷たさを、手首をとおして全身にしみ渡らせる様には。

しかし、先にも述べた二つに引き裂かれた R. の心は、結局、Magda との親密な関係を破局に終らせた。数週間の同棲生活の後にある。この様な女性関係（肉体的なものであろうと、なかろうと）は、Magda との前にもあったし——たとえば Andreas-Salomé 夫人や少女 Marthe など——、また Magda との後にもつづくのである（たとえば画家 Lasard 夫人やおなじく画家 Klossowska 夫人など）。その一人である Lasard 夫人は R. についてこう批評している、「彼は、彼独自の天才のために呪わしい代償を払わなければならなかった。彼の天才は彼に、人間や物のなかに深く浸透して、そのものとの自己同一を遂げ、そこから魔術的な意味において、『名』を引きだすことを強制した。この『名』をとおして、すべてのものが絶対にまでひき上げられて、それが持つ人間的な側面を失うのである。しかし一方、彼の生への好奇心と飽くなき飢渴は、彼にダナイドの遊戯を強いたのである。それは、彼にも他人にもひじょうな苦痛をもたらした。彼にとって生の魅力はあまりに強烈だったので、彼はたえず他人の生に引きつけられてしまう。だが彼は、やはり、たいてい、その敷居にふみとどまるだけであった。」<sup>11)</sup>(註：王女ダナイドたちは、父王の命令により、結婚の夜、自分の夫たちを殺した。) Magda との付き合いの前後の期間に、数多くの詩が、この分裂した R. の心から生れる——人間的な愛と、無執着の愛という、二つの相反すると見える「愛」への憧れの詩が。(ひどい神経症にかかった R. が妻クララとの離婚について思いどったのはこの頃である。) Eros は、もともと、ソクラテスによれば、美の女神アフロディーテの誕生日に身ごもられた存在である。それ故に、神聖な美への情熱を持つこの Eros は、自らは地にひかれる貧しい半人的な存在でありながら、これに安んずることができない。その様に、R. の血にも潜む Eros は、両界の相反する力に強く牽引されながら堂々めぐりの苦闘をつづける。そんな R. であるから、この世の恋人とは、彼にとって、しょせん、“予め失われた恋人”であるほかはなかった。

Ist es nicht Zeit, daß wir liebend  
uns vom Geliebten befreien und es beband bestehn:

wie der Pfeil die Sehne besteht, um gesammelt im Abstrung  
mehr zu sein als er selbst....

〔愛しながら我らは愛するものから身を放ち、  
ふるえながらそれに堪える時ではないか。  
つえられた矢が弦に堪え、勇躍力をためて  
自己以上のものとなるごとく〕　ードゥイノ第一悲歌(1912)

“愛しながら...” これは微妙である。人間的な、場合によっては、肉的な愛の行為をしながらの意である。その受容をとおして、それを更に突きぬけた世界、いわば非肉体的な愛の体験、すなわち超個我的な(“自己以上のものとなる”)境地に至ろうとするのである。Rilke は聖アウグスティヌスではない。アウグスティヌスは神を全心全霊をもって愛するためには、美しい陽の光のひとすじにも見とれることを自らに禁じた。研究家 H. Peters が「...にもかかわらず、リルケは真の意味での 神秘家ではなかった」と言っているのは、この事であろう。Whitman も、そういう意味では、神秘家ではなかった。彼ら二人は、あまりに現世を愛しすぎていた。二人は、とりわけ、R. は芸術家であった。超絶的な美(悲歌にうたわれた天使は、そういう「美」の存在でもあった。天使は、究極的に人間存在の本質につながるものでありながら、その「美」は、いまだ現世にしがみついた人間にとっては死を招来する恐るべき光輝である)、その様な超絶的な美への憧憬力を強めてゆくためには、芸術家リルケにとって、とりわけ女性への憧れは、幻想だと自らを叱りながらも、逆にそれを必須の糧として自らに許すところがあったのである。

さきに、私は、Magda との関係で、「彼女への愛か、それとも神への愛の炎となるか」と悩むくだりを R. の手紙から引用した。しかし、R. の意識の深層では、事は“あれか、これか”の二者択一で割りきれほど単純ではなかったのではなかろうか。彼は、創作上の異常な集中と孤独に疲れはて、遂に Magda との人間らしい愛の幸福を期待して、求婚にふみきるが、それは確かに人間らしい真剣な心からであったであろう。しかしながら、反面、それは、R. 自身がかねがね自らに戒めていた幸福を他者の手による “nouvelle opération”<sup>(12)</sup>(目新しい働きかけ)に期待するという虚しい幻想であったはずである。だから彼女との燃える 関係のなかにあっても、やがてそれは乗り越え、棄て去らねばならぬ。しかも、超絶的な「美」に至るためには、いまだ現世の美と愛を みずからの糧とせねばならぬということ。相手にとっては極めて得手勝手な 自己の 成り行きを R. は無意識のうちに予感していたかも知れない。(また Magda 自身も、彼の求婚を断つたとき、表面の理由はともかくとして、どこかでその事を感じていたかもしれぬ。)それは、さておき、R. は、反面争い<sup>あらが</sup>がたく彼に指向させる絶対の高みへの希求を強めるちからを段々に獲得せんがため、皮肉にも(場合によっては不道德にも)数多くの女性への憧れと愛を食って生きた。それは、確かに深刻なダナイドの遊戯であった。R. と唯一の親交があった同性の友人である作家 R. カスナーは R. を「肉のプラトニスト」と

呼んだそうであるが、それは以上のような意味からであったに違いない。R. は真摯な美の（正確に言えば美による）求道者であった。

しかし、時が来た。憧れにふるえ、力をためにためた R. の弓は、ついに Rilke という個我を世界内部空間(Weltinnenraum＝純粹関連)の太空中矢のごとく放擲する。

Werbung nicht mehr, nicht Werbung, erwachsene Stimme,  
sei deines Schreies Natur; zwar schrieest du rein wie der Vogel,  
wenn ihn die Jahreszeit aufhebt, —1922

〔もはや求愛ではない、求愛ではない、それを超えて溢れいずる声、  
これこそお前の声の本性であれ；まこと季節が投げあげる  
かの鳥のごとく純粹に叫ぼうとも……〕

R. 後期の絶唱といわれるドゥイノ悲歌のひとつ、この第七の冒頭にいきなり “Werbung nicht mehr”(もはや求愛ではない)という言葉がほとばしり出る。私は R. の不安にみちたドンファン的女性遍歴<sup>(3)</sup>の跡を思うとき（それは決してリルケの凡てではないが）、この唐突な、絶叫するような言葉に、R. の痛烈な内心の声を聞く思いがする。これは、もう詩人の修辭<sup>レトリック</sup>というものではない。それは、止むに止まれぬ決意のことばであり、全存在の重みをこめて懸崖から捨身したものの喉から思わず迸る声のようにひびく。

しかし、此处で思い違いしてならぬことがある。R. は求愛を否定した。それは本当である、或る意味の全否定である。ところが、その求愛を否定したとき、R. はもう、たちまち新しい求愛の歌をうたい出すのである。しよせん、R. は自己から抜けだすことはできない。それでいいのである。彼は、彼自身の道にしたがって、いわば愛の弁証法を登攀して新しい愛の高みに到達したのである。その一片は上の詩行に早や姿を見させているが、すこしとんで詩はこう続く。

その鳥のごとく、お前は求愛せよ、それにも劣らず—  
すると見えないところで静かな<sup>とも</sup>女友がお前の声を聞くだろう、  
そして一つの応えがおもむろに彼女のうちに目覚め、  
お前を聞きながら心ふるわすだろう—  
お前の果敢な感情<sup>おもい</sup>に応えるもう一つの熱い感情<sup>おもい</sup>。

あくまでもリルケはリルケである。しかし、この様な愛は、もはや無心あるのみである。なぜなら此処には、愛の応答を無心の内に先取りしている自足の声がある。いや初めから、本来それと一つである「愛」の溢れいずる声がある。その様な声は、現象上の女友の有る無しを超えて、横溢する存在感のなかから迸りて愛の讃歌となる。R. がオルフォイス・ソネット 1-3 で歌ったのは、そういう心であったと思う。すなわち、“(オルフォイスよ) おんみの教える<歌>は欲望ではない。やがては達しうるものへの求愛ではない。<歌>は存在である。”

かくて、R. は個我的求愛から、超個我的（個我を包含する）求愛の境地にふみこんだのである。その世界は、しかしながら、単に「愛」のことにとどまらない。このことは R. を理解する上に重要である。なぜなら、それは、「生」の内がわから、「生」のいっさいの問題を俯瞰し、かつ包摂する広々とした世界（Das Offne）となっているからである。だから、R. は歌う、“一切は横溢である。…どうして、我らが奪われたり、騙されたりすることがありえよう。あらゆる良きものを、すでにして、有りあまるほどに報われてある我ら”。（*Neigung*, 1922 : Das Offne の中にあっては、一切のものが、他のいかなるものによっても犯されることのない、円融無礙の存在である。）

さて、この様にして、彼が矢のごとく、あるいは鳥のごとく放擲された高みは、“世界内部空間”すなわち“純粋関連”の世界であった。それは、前論文ですでに述べたように、R. にとって単なる観念語ではなく、匂わしいオイリュディケの故郷<sup>ふるさと</sup>であった。詩人の空想と言われようとも、それは、彼が否応なしに導かれた新しい魂の現実であった。このことを明らかにするために私は、R. の内生活の深部に立ち入ってきたのである。オルフォイスとオイリュディケの伝説は、R. の想像力によって変容されたが、その意味は殆んど、彼自身もあずかり知らなかった古代オルフォイス教の密儀にまで高められた感がある。そして彼はそれを歌うのみでなく、生きねばならなかった。

Erde, du liebe, ich will. Oh glaub, es bedürfte  
nicht deiner Frühlinge mehr, mich dir zu gewinnen, einer,  
ach, ein einziger ist schon dem Blute zu viel.  
Namenlos bin ich zu dir entschlossen, von weit her.  
..... Überzähliges Dasein entspringt mir im Herzen.

〔大地、わが愛する者よ、私は（わが委託を）成しとげよう。おお、信ぜよ、  
お前の春は、たった一つでいい、お前が私を捉えるには、それ以上の春は要らない、  
ああ、たった一つの春だけでも、すでにわが血にあり余る。  
はるか遠くより、私は、言いがたくお前にむかって決意した。  
..... 測りしれぬ存在が  
わが心に進んでる。〕

—第九ドゥイノ悲歌, 1922

R. は世界の恋びととなった。彼が哀しくも現世の「女」のうえに描いては、そのつど幻滅し失ってきたもの——あの＜浄福なる者＞は、この世界のいたる所にこそ在った。R. の内にオルフォイスの眼が開かれた。即ち、キッペンベルクの言う“日常性を変容させる魂の美的原理”が働きはじめた。すると世界はオイリュディケであった。この世界、この現世に、オイリュディケの満ちみちる der reine Bezug（純粋関連）を触感すること。ありとあらゆるものが、彼女の光りに内がわから照射されているのを触感すること。夜の暗闇でさえ光りの粒子か

ら成っている。これを告知し、讃美することが、彼の日ごと果すべき真の使命となった。そのことは、早く1912年、スペインのトレドにおける或る神秘体験<sup>(4)</sup>によって彼が気づかされたことであるが、今や彼は、それを自己の（いや人間の）使命として確信するに至るのである。

（世界を——この恐るべき、残酷な現象世界を救済する道は、これを通してのみであるという考えが、すでに第一次大戦中の R. のころにあった。すなわち、ものの隠れた本質を認識し、それを讃美することを通して。しかし人類は、まだこの事の意味の重要性に気づいていない。人類はやがて経験するであろう、この最も偉大な内面革新の道によって、静穏と調和の世界が招来されることを。しかし人類は、まだそれへの最初の数歩も踏みだしていない。この静かな神秘的な世界変容の思想は、R. が晩年に確立するに至った境地であるが、この事については稿を改めて論じたいと思う。—1917, 1919, 1923の R. の手紙参照）

可視的なこの世界は、不可視の *der reine Bezug* と別物ではない。R. は、この世界内存在を、“春の薄絹をまとして光り輝くひとりの<sup>おとめ</sup>処女の眠り（オルフォイス・ソネットⅠ-2）”にもたとえている（“眠り”とは、生の運命から解き放たれた絶対の至福境を象徴する）。樹も草も大地のすべ<sup>おとめ</sup>てが、そのまま処女の眠りをねむっているのである。〔*Und (ein Mädchen) schlief in mir. Und alles war ihr Schlaf. ひとりの処女が私の内に眠った。そして全てが彼女の眠りだった：*〕

しかし、ここでしばらく立ちどまって Whitman のことを考えてみたい。R. の上述の事と関連した詩が一つある。

Earth, my likeness,  
Though you look so impassive, ample and spheric there,  
I now suspect that is not all;  
I now suspect there is something fierce in you  
eligible to burst forth,  
For an athlete is enamour'd of me, and I of him,  
But toward him there is something fierce and terrible  
in me eligible to burst forth,  
I dare not tell it in words, not even in these songs.

〔大地、わが似姿よ、  
お前は、豊かに球体をなして、そんなに無感覚をよそおっているが、  
私は、いま、それだけではないのではないかと思っている。  
私は、いま、お前の内には爆発せんばかりの  
凄じい何ものかがあるのではないかと思う。  
なぜなら、いま一人の逞しい男が僕に魅惑されている、そして僕も彼に魅惑されているからだ。  
しかし、僕の内には、彼に向って爆発せんばかりの  
凄じく恐ろしい何ものかがあるのだ。  
僕はあえて言葉でそれを語るまい、これらの歌のなかでも語るまい。〕—キャラマスより、1860

まず Whitman は大地を上のように感じて歌う。Rilke の沈潜と Whitman の豪壮。表



現上の差はあっても、根本の感じかたに同質のものがある。大地は、二人の詩人にとって、ただ利用されるべき無感覚な素材ではない。それは魂と魂とをもって交流する愛の対象である。私は、今迄、R. の創造の秘密を明かにするため、生活における R. と女性との関わりを考えてきたが、今度は、いよいよ W. のことについて考えなくてはならなくなってきたようだ。詳細は後まわしするとしても、差しあたりこの詩においても W. の「性」は大きな意味を見せていることに注目したい。R. は女性への憧れをとおして、世界への愛に至るが、W. は男性への執愛をとおして世界への愛をますます深め、それを体現する。現われは違うが、両者は、同じたましいの力学に衝き動かされた詩的血縁の兄弟である。

W. はしばしば同性の若者を熱愛した。事実上の **homosexuality** (同性愛) であると断定する研究家もいる。彼は、この倒錯したエロティシズム (かりにそうであるとするならば) のために何度か深刻な苦悩に落ち入ったようであるが、この詩の場合、さいわい、一人の若者への彼の愛は、自我のなかに閉塞されず、世界への愛の感情と微妙に釣りあっている。W. は、渾一でしかも激しい力をもって流動する生命の宇宙的磁場の中に在る自分自身を感じるのである。ゴッホの、あのめくるめく「星月夜」と「ひまわり」の強烈な生命体験が W. のなかにも起っていたのではないか。人間も地球も火のような愛のおもいに爆発せんばかりに疼いている。若者へのエロティックな愛は、無感覚と見える自然の内にも隠れている巨大な愛のころを W. に感じさせる。そして大自然への、ときにはセクシュアルなばかりの愛が彼の内にかき立てられるのである。このことは、感情移入あるいは原始的なアニミズムの例証として説明し去ることもできるだろう。しかし、この自然に対する W. の感情は、**homo.** の一時的興奮をはなれて、死ぬときまで持続しているのである。“真の詩人とは自然と人間の魂とを、歛びのうちに和解・融合させるものだ”と言ったのは彼が死の前年72才のときである。そして *Song of Myself*, sec. 45 の中では、W. は自然をこのように歌う。Rilke はこの詩を読んだことがあるだろうか。

おお、青春の季節よ！ 絶えずつき動かされる弾性！

おお、均斉がとれ、華やぎ、豊満なる「人間」

僕の恋人たちが僕を窒息させる、

...

日中は川の岩たちから、おーい！ と、わが頭上でゆれ動き、囁りながら叫び、

花壇、蔓草、もつれる下生えから僕の名前を呼び、

わが生のあらゆる一瞬間に羽をとめ、僕のからだに、優しい匂やかなキスを浴びせかけ、

音もなく彼らの胸のおくから手いっぱい

いいものを掴みだし、ぼくにあげると言う。 —1855

以上でも分るように、これら両詩人にとって、自然は、花鳥諷詠の域を超えて、そのひとつ、ひとつが愛の脈動する生きものであったということである。

再び、Rilke にもどろう。彼は、その散文作品「若い労働者の手紙」(1922) の中でこう言っている、「貧しくなった地上。…都会がこんなに多くの醜悪な人工照明と雑音で満たされたのは、我々が真の光りと歌を 未来のエルサレムに持ち出した結果にほかなりません。」この言葉は、人間界から高く隔絶した厳しいキリストの姿を印象づけ、人々に死後のあるいは世界終末後の天国をのみ期待させるキリスト教会のありかたを非難したものである。しかしながら、この事は、現代の我々の生きかたにもそのまま当てはまるかも知れない。なぜなら、我々は、たしかに旧来の厳めしい神を追いつ追いつしたが、序でに“真の光りと歌”のみなもとまで追いつ追いつしてしまったからである。文明と知識は大いに栄えたが、それに反比例して、ある種の想像力が枯渇していった。精神の空洞はひろがり、かわりに快楽という偽ものの神が盛んに信仰されている。言うところの想像力とは、ものの内的な存在や価値を透察する視力のことである。それは、現象の窓をとおして、より美しい心的形象と高貴な感動を我々に体験させる。感覚は快楽を味わうが、同時に、それと等量の苦痛と虚脱を覚悟しなくてはならない。知性は、分析し総合し、利用するが、ある渾一な、言いがたい何ものかを取りにがす。“一輪の野花に天国を、一粒の砂に世界を見る” ブレークが、“The World of imagination is the world of eternity.”と言ったときの想像力とは、明らかに単なる 空想と区別された 詩的知覚力 (the Poetic Genius) のことであつたと思う。

百千の場所に 初源の泉がある。

ひざまづいて、驚くことを知らない者には

触れえざる純粋なちからの戯れ —オルフォイス・ソネット II-10

世界は、そしてその中に生きる一切のものは、愛され跪かれるのに価する。“光りと歌”は未来にあるのではなく、現在にある。かくして、詩人リルケの目に現われた、万有に普遍するオイリュディケは、彼ひとりの愛の飢渴をいやすく内なる<sup>おとめ</sup>処女>であるばかりでなくなった。彼女は、人間にとって Schicksal (生の不条理) 超克の道を静かに先導する<淨福>の存在となつたのである。

R. が「マルテの手記」(1909) の中で主人公に感動をこめて語らせているところがある。それはボードレールの詩<死体>についてである。「この怖気ふるうような、一見むかつくばかりのものの中に、凡ゆる存在を貫く存在を見ることが詩人の課題だつた。回避も選択もゆるされなかつたのだ。」主人公マルテは、R. も言っているように、大部分彼自身の精神を担つた人物であるから、この事はそのまま R. 自身の重大な課題であつた。だから彼は、この事について妻のクララにも、またあの Magda にも繰り返して語っているくらいである。「あらゆる存在を貫く存在」とは何であろうか。すでに語つてきたことだから贅言を要しない。ただ、この怖気ふるう腐乱<死体>は、また人間の「運命」の象徴でもあることを付け加えておきたい。いかなる運命の相をも貫いて今此処に在る輝ける何ものか。それを視つめ、かつ愛することこそ自分に課せられた課題だと R. は感ずる。そうすることは、「生」がやがて悲惨の仮面を脱

いで、その輝ける実体を現実に顕わすことにつながってゆくのである。

さらにまた、R. は「マルテの手記」のなかで、上につづいてフロベールの小説「修道士・聖ジュリアン」に言及している。「(聖ジュリアンのように) 癩患者のそばに身を横たえて、恋人たちの愛の夜のぬくもりをもって、癩者を温めること、そこまでやれる決意があるか？その事が私にせまってきた。」戦慄すべきもの、醜悪なるものの中なる〈浄福〉の存在、〈美〉を感得する内的視力を持つこと、そればかりではない、それを恋人の情熱をもって愛すること、これは、R. が「マルテの手記」執筆当時(1904~9) 主人公マルテに託しようとした余りにも大きくて困難な彼自身の問題であった。「それを感得する内的視力はありませんが、私には愛が欠けていました。」と彼は恋人 Magda に書いたことがある<sup>5)</sup>(1914) この言葉は、一種のたじろぎを含んだ R. の反省である。言いかえれば、その当時 Magda との愛の関係にあって、彼のエロスが、たじろぎつつも心の底で、何を志向していたかを如実に示す印象的な言葉ではないか。

自然(生)と芸術の敵対関係。『芸術とは、R. にとって、限りなき愛と生命への衝動を媒体とする透明な美の結晶体であるべきである。しかし自然(生)はその衝動を冷酷に拒否する。『自分ほど、芸術と自然との根元的な対立を意識しているものはない』と彼は言った。(1910、タクシスへの手紙) 長年 R. を圧迫した、この運命の固執観念は、しかし、1922年、ドゥイノ悲歌成立を境にして、みごと砕け散ったように見える。「観」が一変したのである。そして、あの晴朗な——もはや悲しみの翳りさえも透明となった——オルフォイス・ソネット55篇が、このドゥイノ悲歌の完成期を前後にはさんで、泉のように噴き出たのである。それらは、「生」の無条件な讃歌であった(先にその一部を挙げた第七悲歌と第九悲歌は、制作の期日から言って、すでに、悲歌の偽装をした讃歌であると言えよう。) この事については、すでに述べた。今や、死と対立と敵意とにみちた「生」の意識から解き放たれた R. は、この大地を心から讃美し、愛する気持になった。そこに生きる樹々や山々はいうにおよばず、自己と俗世の人々の生きざまを視つめる R. の眼は、透徹し、なごんだ。彼のところは、春の雪どけ水のようにミュゾットの自然をうるおし、やがて貧寒な人間の流域にそそぎ入り、清澄に、ゆるやかに流れてゆく。その様を私たちは、更に彼の死にいたる4年間の詩群のなかに見ることができるだろう。

今、此処に少しわき道にそれるが、ある理由あって、二つの詩をならべてみよう。R. の詩と、W. の詩である。

(R.) Ach entzogen wir uns Zählern und Stundenschlägern,  
Einen Morgen hinaus, heißes Jungsein mit Jägern,  
Rufen im Hundegekläff.  
Daß im durchdrängten Gebüsch Kühle uns fröhlich besprühe,  
und wir im Neuen und Frein—in den Lüften der Frühe  
fühlten den graden Betreff!  
Solches war uns bestimmt. Leichte beschwingte Erscheinung.  
Nicht, im starren Gelaß, nach einer Nacht voll Verneinung,

ein verneinender Tag.

Diese sind ewig im Recht: dringend dem Leben Genahete;  
weil sie Lebendige sind, tritt das unendlich bejahte  
Tier in den tödlichen Schlag.

— *Vollmacht*, 1926

〔ああ、我ら「時」を数うるもの、「時」を告ぐる者らの手より逃れたし、  
ある朝、狩へと勇みでた、獵兵従え  
吠えたける獵犬の声より高く叫びつつ。  
押しわけ進む灌木のしげみ、冷たさが歓喜してしぶきを飛ばした。  
そして我ら 清新と自由の原に——早晨の大気のなかに  
まこと目ざす獲物を感じた。〕

これこそ、我らの運命<sup>きだめ</sup>であった。軽やかにも翼ある姿こそ。  
非ず、否認にみちたひと夜ののち、さらに又、  
索漠と部屋にある否認のひと日に非ず。  
密に、密に、いのちに触るるもの、その人らこそ永遠にあやまたず  
いきいきと生くるかぎり、かの果しなく肯われたる獲物は、  
死のわなに歩み入るなり。〕 —“溢れる力”，1926

(W.) Word over all, beautiful as the sky,  
Beautiful that war and all its deeds of carnage must  
in time be utterly lost,  
That the hands of the sisters Death and Night incessantly  
softly wash again, and ever again, this soil'd World;  
For my enemy is dead, a man divine as myself is dead,  
I look where he lies white-faced and still in the coffin—  
I draw near,  
Bend down and touch lightly with my lips the white  
face in the coffin.

— *Reconciliation*, 1865~66

〔一切のものの上に言葉、空のように美しい、  
美しい言葉、“戦争と殺戮の行為は、時きたらば  
ことごとく消えうせるべし。  
「死」と「夜」の姉妹、彼らの手は、絶えることなく  
優しく、幾たびも、幾たびも、この穢れたる世界を洗うべし。”  
僕の敵は死んだ。この僕に劣らず神聖なひとりの男は死んだ。  
僕は、棺おけに蒼白な顔をして、ひっそりと横たわる彼の  
ほうを見る—僕は近づく、  
身をかがめる、そして僕は、ぼくのくちびるで、  
この棺の蒼白な顔にそっと触れる。〕 — 和解, 1865~66

前者は R. の最後の年の作品である。ここには、颯爽たるイメージと弾んだ生命の律動感が

あって、すでにあの痛苦にみちた死の病を間近かにひかえた人の作品とは思われないほどに明るい。それだけに、この詩は、私にあのベートーヴェンの、やはり最後の作品「絃楽四重奏曲第十六番」を思いださせる。苦渋の生涯を突きぬけた後の、一種、澄んだ悟境と遊びのころさえも両者に共通しているからである。とにかくも、ここには、晴れわたった秋の陽ざしを吸って金色にかがやく果物の充溢がある。これは、**Rilke** という樹にみのった——彼のいっさいが、ここに凝って熟した——1個の詩の果実であると言ええるかも知れない。

憧れられる大いなるものは、彼方にあらずして、すでに今、わが手中に在りという絶対の肯定感（“果しなく肯われる獲物”）。それは、その如く成る。それは、その真を自証自得すると、これは歌っているのだろう。純粹存在の眼（生命を“生き生きと”体感する者の眼）が、逆転した新しい遠近法のなかで、生の不条理を、はるか遠方にかすんだものと見下す境地である。この頃の **R.** は、もはや彼一個の自我を語っているのではなかった。あらゆる人間をとおして、彼は、人間本来の、潑刺たる不滅のいのちの相を歌ったのである。

さて、話の視点を変えれば、**R.** は、この詩に先立つ12年前に詩 *Wendung*（転回）のなかで、自分に諭すがごとく、こう呼びかけたことがある、“目の仕事は成しとげられた。今や心の仕事を……視よ、内部の男よ、お前の内なる少女を視よ。百千のものから奪いとったこの女を、捉えたばかりで、いまだ一度も愛したことの無いこの者を。”つまり、これは、物の輝かしい本質を探求する厳しい“凝視”の仕事（*Neue Gedichte* 時代、1904～8）から温かい愛への仕事（*Herz-Werk*）に取りかからねばならぬということを意味したのである。この様に **R.** が自らに投げかけた問題は、また彼があゝマルテに託そうとした不可能ともみえる窮極の課題、“恋人の温い心をもって癩患者と寝る”境地と関わりがあった筈である。私が関心を持つのは、その事が、上に掲げた詩によって代表される **R.** 円熟の作品群により、どのように応えられたであろうかということである。

すでに述べたように、オルフォイス・ソネットや第九悲歌で、ついに **R.** はその様な領域に殆んど全心的に踏みこんでいったかに見える。彼は、大地（それは人間の生をも含む）の恋人となったからである。（此処で、私は **Whitman** が“宇宙のまつたき愛人、そのひとこそは最大の詩人である”と *Leaves of Grass* 序文（1955）の中で言った言葉を思いだす。）

だから、我々は、**R.** が悲歌以後、巷間の人間をどのように歌うようになるかに関心を持たざるを得ない。貴族の末裔であることを根拠もなく信じて、それを密かに自負していた**R.**、極めて誠実ではあるが、世間をうとんじた孤高の人 **R.** が、生身の凡俗とどんなに親密な関わりを持つにいたるか。また、ささやかではあっても、彼らからどんな新鮮な驚きや共感を得ることができるか。もしこの観点から見る事が許されるならば、この作品を含めて悲歌完成後の彼の、決してきれいごととならざる、澄明で現世讃美的な数多くの詩に、私はやはり一抹のものの足りなさを感じざるをえない。私的な欲望から超脱はしたが、もう一步の距離をおいた観照者としての **R.** の眼なざしが、いくらか気がかりである。透徹さを少しも失わないで、人間に肌と肌で触れてゆく詩的感動というものがあるのではないか。「詩人か、聖者か。この両極の間

に R. の人生の内面劇が緊張のうちに回転する... しかし、彼は詩人であった。言葉の絶対的意味において、彼は詩人であった。」と研究家 H. Peters は言っている。これは、そのへんの事に対する一つの答えでもあろう。しかし「芸術は、傷を癒すことができるか？それは死の苦しみを和らげることができるか？芸術は、絶望せる者を慰めない、それは飢えた者を満たさない、それは凍る者を暖めない」<sup>6)</sup>と真剣に思いつめたのは R. であった。そして、この事は、R. のみならず誠実な美の探求者たちが、しばしば自らに問うて悩んできた深刻な問題である。そして、今ここに、その一人である R. は、この問題に対して、根源的に——少なくとも彼にはそう確信されたのだが——彼自身の到達した芸術をもって、根源的に、それに応えることができたのである。そのことに間違いはない。だが、それでもなお、晩年の澄んだ目の R. は、彼の胸の内深く、いまだ“観る者”のうしろめたさが一点残っているのを意識しなかっただろうか。私は、ついそんな事を思ってしまうのである。

次に、Whitman の詩にゆこう。すでにここ迄 R. の詩について筆者の考えかたを述べてきたのだから、W. のこういう詩が、R. のものと並置された理由はもう明らかとなったことだろう。私はこれについて余り言う必要はないかもしれない。

例によって W. らしく造形は素朴・直截である。しかし、読者は、この詩から親密な人間のあたたかみが伝わってくるのを感じないだろうか。ほとんど痛切なほどの暖みがある。青空のもとに、死して横たわるひとりの敵兵、それを見る W. の眼は人間の情愛にみち、しかも透徹している。My enemy is dead, a man divine as myself is dead.

南北戦争を奴隷解放のための戦いとして、詩人らしく純粋に受けとめた W. その戦いに、待ちに待った新しいアメリカ・デモクラシー到来の聖なる足音を聞く思いがして奮いたった W. そして、今は触れないが、文字どおり全心全霊をかたむけて数々の献身を示す W. その W. の敵がここに横たわっているのである。しかし彼がその敵なる死者を見る眼は、透徹をきわめている。“僕の敵は死んだ。この僕に劣らず神聖なひとりの男は死んだ”あの「*Songs of Myself*, 52篇の詩は Whitman のナルチシズムだ」と言われるほどに宇宙大に自己を讃美した彼——そう言えば Rilke のナルチシズムについても屢々言われるが——その W. にとって、この敵もまた自分に少しも劣らず一人の神聖な人間なのである。彼は身をかがめて、死者の蒼白な顔にそっと口づけする (W. のホモのエロティシズムもここまで昇華されればもう言うことはない)。この詩の冒頭の第一語から最後の語にいたるまで、少しの無駄もなく、真実が深い美をたたえて我々の心を打つ。私は W. のなかでも作品として特に優れたものを選んだかもしれない。Rilke の作品には、つねに独創的なイメージと彫琢があるが、W. には、その様な精緻の美はない。ときに真実や理念が突きでて、詩語としての緊張感に欠けることも稀ではない。だが、この詩の場合はそうでない。張りつめた詩的気韻が、人間の透徹した心のあたたかさと完全に一体をなしている。しかし、今、私は両者の詩の優劣を論じているのではない。ここでは、ただ、W. の詩と対比することによって、同じ人生と芸術の一致を目ざして、ひとつの高みに到達した R. 晩年の詩境を、この観点から考えてみたかったのである。(続く)

## 〔註〕

- (1) Mandel, *Rainer Maria Rilke*, Southern Illinois University Press
- (2) R. はタクシス夫人に当てた手紙 (1912, 12月) のなかで、スペインの素晴らしい風景、澄みきった大気のもとに横たわる山々を見ても、さっぱり心動かされない自分の空ろな気持ちを嘆いて、こう書いている、「まず自分自身が、底の底から変らなくてはだめなのです。そうでなければ、全世界のどんな驚異もむなししい事でしょう。…ああ、私はまだ、幸福を、他人からの新奇な働きかけ (*nouvelle opération*) に依存する気持ちから完全に抜け出ておりません。駄目ですね。人間のことを通り過ぎて、極限まで、地の果てまで行くのが私の運命ですのに。…」
- (3) Mandel, *Rainer Maria Rilke*: タクシス夫人 (R. を温かく理解した、彼の後援者) でさえ、彼の女たらし的においのある行為にいらだって、彼に穏やかにこう言った、「あなたと較べれば昔のドンファンはまるで赤ん坊みたいですね。」
- (4) スペイン体験 (1915, Ellen Delp への手紙で) : 「トレドのスペイン風景は (私が限りもなく体験した最後のものですが)、この様な私の精神状態を極限まで追しやりました。なぜなら、其処にある外的事物それ自身が——塔も山も橋も、すべて等しく、事物がそれによって表現される、あの内的等価物の、凌駕しがたい未曾有の熾烈さを所有していたからです。現象とヴィジョンが、いわば至る所の対象物の内に一緒になってやって来ました。そして、凡ての事物の中から、一つの完全な内部世界が顕示されたのです。それは、あたかも、事物の空間を自らの内に包含するところの、ひとりの天使が、盲目で、自分自身の中をじっと覗きこんでいるみたいなきなでした。
- この様な、もはや人間のがわからなくて、天使の中で視つめられる世界、これが恐らく私の真の使命かもしれません。少くともその仕事のなかに私の今までの努力が凡て合流するかもしれません」
- (5) Magda への手紙 (1914) : 「ご存知のように、私には醜悪という問題があったのです。私は、自分の芸術で、醜悪から尻ごみすることはできませんでした。なぜなら現実のものに目をおぶことは私の仕事ではなかったからです。私は、ものの内部に入りこまねばならなかったのです。そして確かに、私は自分が 醜悪なもの内部に入っているという内的感得を持ちました。(しかし) 私は癩患者のそばに身を横たえる勇氣はありませんでした——私には愛が欠けていたのです、だから、そうしたって、私の手の中でがん腫が至福の美に変わることは決してなかったでしょう。(筆者・註：フロベールの小説では、聖ジュリアンは癩患者と抱きあったまま天上に引きあげられた。) そうです、だが私は、がん腫のなかにも深く潜りこんでゆかねばならなかったのです、其処では、癩でさえ、つねに (幼児のごとく) 清浄・無垢なのです。其処で、私は力のかぎりを結集し、その汚物に熱願し、それに不浄の意識を捨てさせねばならなかったのです。汚物がついに私の言うことを信じました——それ自らの中にも美があるのであり、今までそれはそれを自覚していなかったのだということを。」
- (6) H. F. Peters, *R. M. Rilke: Masks and the Man* より引用。第一次大戦中の R. のことば、彼は大战が人間の悪意の結果であることに気づき、愛国心の美名のもとに、嘘と邪悪が横行していることに打ちひしがれた。〔これに関連して、Rilke の、あまりに詩人的な観念論性を指摘するむきがある。彼は、革命 (特に唯物史観に立つ) 思想に対して、決して無関心ではありえなかったし、また、それについて彼独自の見解を持っている。〕

(昭和47年 9 月30日受理)